

MY TOWN

むかし大學前・いま関大前(続き)

二〇回生 浅野 倉平

—KANDAI—MAE—

現在の関大前駅のプラットホームの長さは、一六二メートルである。この長さは、二代目大学前駅に、一両が十五メートル余りの、マッチ箱(一〇系P形車両)の愛称で親しまれていた、三両編成の電車が停車していた頃の、三倍以上の長さにあたる。しかし、初代・二代目の大学前駅は、直線の線路沿いにあったのに対して、関大前駅は二代目より、更に、淡路方向に寄せ造られているので、駅は全体的に曲線沿いであり、その為に、プラットホームの九〇%近くが湾曲している。しかも、その淡路寄りの先端三〇メートル先は、もう、元花壇町駅跡である。

この駅の主な利用者は、言うまでも無く「関大生」であり、大学の授業がある日には、一日、三万五千八千人の乗降人員があるが、大学が休暇に入ると乗降人員は、一挙に落ち込み、この三分の一に減る様だ。

ちなみに、関西大学千里山キャンパスの在校生は約二四、〇〇〇人(内、女子は約九、〇〇〇人)であり、付属の第一高等学校には約一、三五〇人、又、第一中学校には約七六〇人の生徒が在籍しているのだが、駅の乗降人員から推測すると、大学生は、毎日、約半数程度しか登校してはいないのではと思われる。

尚、大阪府統計年鑑(平成十七年版)によると、平成十六年度の、関大前駅 及び 千里山駅の交通量調査に基ずく乗降人員は次の通りになっている。

関大前駅 乗降人員 三五、一一〇人
千里山駅 乗降人員 一四、九〇八人

—四五〇メートル—

これは、関大前駅から関西大学正門前に至る通りの、おおよその長さである。この長さは吹田市随一の旭商店街に匹敵する。

関西大学の校友向け刊行物を見ると、この通りの事

を「関大前通り」と称している。されど、この通りには、その様な表示はどこにもなく、又、地元の人達も、昔から、通称としても、その様には呼んでいない。

この様に、大学と地元の間には温度差のある、この通りであるが、大前駅時代には、まだ、多くの空き地が残る住宅地であった。しかし、関西大学が新学部と新学科を次々と開設して、学生数が増えるに従い、空き地には店舗が建てられ、又、従来からある住宅も徐々に店舗へと造り替えられるにおよび、この地域は、遂に、住居地域から近隣商業地域になってしまった。

そして、今や、この通りは、一階が商店、二階以上が住居、又は、ワンルーム・マンションと言った建物が立ち並ぶ街並みとなり、夜は大学二部(夜間)の講義が終了後の、午後十一時頃まで明かりの灯る、関西大学の門前通りと化している。

この様な街並みのこの通りには、現在、飲食業^二十八、娯楽関係施設^二十四、不動産幹旋業^二十、携帯電話代理店・美容院^二各四、コンビニ・書籍店・DPE店^二各三、理容店・歯科医院・薬局・コピー専門店・整骨院^二各二、文具店・酒販店^二各一、などの店が並んでおり、これらの店舗の内、二階以上がワンルーム・

マンションになっている建物は二十三棟もある。

だが、関西大学の年間休学日数が、一七〇日以上もあるこの通りでの商売は、なかなか大変のようで、近所のサンドイッチ専門店のおやじさんの話では、学校が休暇に入ると、売上が三分の一に減るとの事である。

この数字は、凶らずも、関大前駅の乗降人員の動向と一致している。

尚、関大前の、この通りを除く地域は、今では、ほぼ、住宅地として開発され尽くされている。しかし、バブルの絶頂期に山を削り、池を埋め、藪を切り開いて造成された宅地には、袋小路になっている所が何箇所かあるのは残念なことだ。

—日曜日の風物詩—

関大前の日曜日と言うと、ひっそりとしているのでは、と、思われるが、関西大学は貸会場業にも勤しんでおり、結構、賑わっている。一年に約五十四日ある日曜日の内、少なくとも三十数日は、国家公務員採用試験・司法試験・公認会計士試験・予備校の模擬試験・各種検定試験・その他の資格試験等々と多彩な催しが行われている。平成十八年六月二十五日には、次の様

な案内板が六枚立てられていた。

「関西大学アジア文化交流研究センター 第二回 国際シンポジウム会場」・「TOEIC試験会場」・「中国語検定試験会場」・「独検定試験会場」・「色彩検定試験会場」・「関関同立学力判定模試会場」等であった。

尚、資格試験などがある日には、資格講座を開設している会社が、挙って回答速報を配布し、講座への受講者の勧誘をしており、賑やかと言うより、むしろ、五月蠅い位である。

又、その様な日には、関大前駅でも臨時の乗車券売り場を開き、乗客の対応に当たっている。

—散歩道—

元千里山遊園地を含む関西大学の構内は、緑が豊なばかりでなく、蠟梅・白木蓮・桜・鶯・つつじ・若葉・せみ時雨・金木犀・銀杏・黄葉・紅葉・百舌・山茶花と季節感を楽しめ、その上、適当なアップダウンがあり、早朝だと車の往き来の心配がないので、近隣住民の絶好の散歩コースである。だから、私も、毎朝、家内と共に一時間ほど歩いている。散歩中には、十数組の常連に出会い、お互いに朝の挨拶を交わしているが、

その半数は犬連れである。我が家では犬を飼っていないので、気に入った犬がいると、名前を聞き、可愛がっているが、飼い主さんの名前はついぞ聞いたことがない。従って、飼い主がどこの誰なのか、未だに判らない。でも、その様な仲の人達ではあるが、誰か一人でも、しばらく顔を見せないと、どうしたのかと思う。これが人情というものなのか・・・

—買い物道・回り道—

関大前には、先の様な店はあるが、残念ながらスーパーマーケットがない。それで、買い物は、母校の近くにあるスーパーマーケットに歩いて行くことが多い。

関大前駅と千里山駅との駅間距離は、約八〇〇メートルで、電車に乗ると僅か九〇秒、歩いて一〇分程度の道のりである。しかし、単純にスーパーマーケットを往復するのではなく、できるだけ多く、楽しく歩くために、往路は関西大学の地獄坂を越え、母校の正門前を通り、後輩達の元気な声を聞いてパワーを貰い、復路は上の川沿いの道や、下の噴水から千里山西一丁目・吹田一中・関大前駅を経る道筋とか、又、反対に、千里山佐井寺図書館前から伊射奈岐神社・佐井寺を経

て関大構内を通り抜けるなどして、わざと回り道をしている。

このお陰で、朝の散歩と合わせると、年間、約四二〇万歩、距離にして、二、九四〇キロメートル。この距離は旭川から鹿児島に至る距離を歩いたことになる。

—空の路—

伊丹空港を離陸した北海道・東北・東京方面へ向かう航空機は、左に急旋回をしながら上昇し、三分足らずで関大前上空に達する。私は年に四〜五回、この上を飛んでいるが、関大前付近は、飛行コースの真下に当たるため、機窓より、この一帯を見ることは難しい。

しかし、時には関西大学構内の南外側を飛ぶ事がある。その様な時には、進行方向左側の機窓から、僅か十秒足らずではあるが、関大前一带と母校の千里第二小学校を垣間見る事が出来る。この様に関大前上空には、一日、八十余便の航空機が東へ向かう空の路があると共に、又、大学構内の地下には、一日、二十五万台の車両が通行する名神高速道路の千里山トンネルが通っている。

尚、我が家の屋上から西の空を見ると、南の方角か

前の銭湯〔大学温泉〕へと疾走したのだが、今では、その同じ道を逆方向に、校旗を先頭にして、軽快なマーチを奏でながらパレードが進んでいる。

—関大前から高槻市へ—

関西大学では、千里山・天六キャンパスに続き、平成六年(一九九四)四月、高槻市の山の手地区にある霊仙寺町に高槻キャンパスを開校し、ここに総合情報学部を設置した。同大学では、更に、二十一世紀にふさわしい新たな教育を実現するために、第四番目のキャンパスとして、JR高槻駅北側に三十階建てのビルを建設し、ここに、幼稚園から小・中・高校と、新設学部・大学院を平成二十一年(二〇〇九)四月に開校すると言う、「二二〇メートル まるごと関大タワービル」構想を平成十七年(二〇〇五)二月に発表した。しかし、その後、この構想は一部が手直され、幼稚園と小学校を別塔にし、中学から大学院までを二十三階建てのビルに収容し、二〇一〇年の開校を目指している。

又、日本を代表する男子フィギュア・スケートの高橋大輔選手・織田信成選手が在学している同校では、全国の大学では初めてと言われる、国際競技規格のア

ら伊丹空港へ着陸態勢に入った航空機が、円山町の町並の彼方に消えてゆくのが見られる。しかし、機窓からは、円山町の陰にあたる我が家は望む事は出来ない。でも、元千里山遊園地の飛行塔跡付近に建てられている関西大学の第三学舎は、はっきりと見て取ることが出来る。

—大学祭から千里祭へ—

関西大学の秋の祭りを、以前は「大学祭」と呼んでいたが、今では「千里祭」と言う名で開催されている。

この祭りの歴史は古く、第一回大学祭は、大正十五年(一九二六)十月に挙行されており、第二次大戦中は、一時、中断されたものの、戦後は、昭和二十一年(一九四六)六月に復活、挙行されている。この当時の大学祭のフィナーレを飾ったのは「土人踊り」だった。しかし、現在の千里祭のフィナーレは、応援団リーダー部、吹奏楽部、バトン・チャリダー部の三部によるパレードである。

昭和三十年代はじめ、土人踊りが終わると、土人に扮した学生が身体に塗った墨を落とすために、大学のグラウンドから、当時、大前では、初めて開店した駅イース・スケート・リンクを現高槻キャンパス内に、平成十八年(二〇〇六)七月に竣工させるなど、手狭になつた千里山キャンパスから高槻市へとそのシフトを移している。

手狭と言うと、当会の伊藤千恵(四十三回生)・千三小(二回生)さんがコーチを務めておられる関西大学馬術部の馬場が、新校舎増築のために、平成十六年(二〇〇四)十二月、千里山キャンパスから高槻キャンパスに移転してしまい、毎朝の散歩の折に、楽しみにしていた馬達が見られなくなったのは残念である。

学校が発展するのは、OBとしては嬉しいことであるが、その反面、地元民としては、これまで、関西大学千里山のイメージが、何年か先には、関西大学リ高槻となつてしまわないかと、少し引つかりを感じる。

—八十二回生・(八十五回生・八十八回生)—

我が家の隣には、妹の平工(浅野)泰子(二十六回生)の長女夫婦が住んでいる。この夫婦には、三人の子供があり、長男は千里第二小学校の二年月組(平成十八年十二月現在)に在学している。彼が小学校を卒業する時には八十二回生となり、二人目の長女と三人目の次

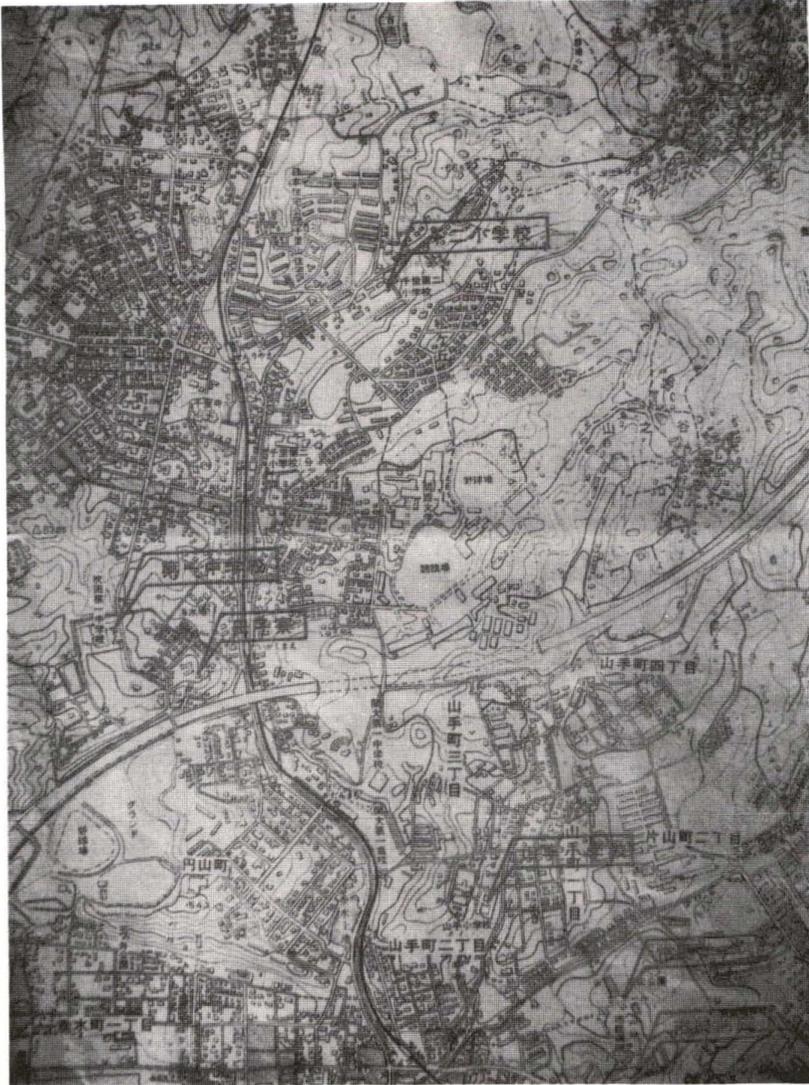
女は八十五回生・八十八回生の予備軍である。
毎朝、七時四十五分頃になると、長男は「行って参ります」と元気な声をかけて出かけ、近所の友達を誘って登校しているが、関大前には彼等を含めて沢山の後輩達がいる。

「頑張れ！ 後輩たち！」

完

―あとがき―

「むかし大前・いま関大前」を二回にわたって紹介させて戴きましたが、ここに掲載した地図は、駅名が大前前から関大前になる直前の、昭和三十九年二月に調整された吹田市全図の一部です。この地図では、駅名が「ひらかな」で表示されていますが、この地図が調整された二ヵ月後の四月十日には、大前駅と花壇町駅が統合され「関大前」駅が開設されています。又、この地図により見えますと、元千里山遊園地は、ほぼ原型を保っている様に見受けられます。それにしても、この当時の、この地域には、まだまだ、多くの田畑・森・林・空き地があった様です。

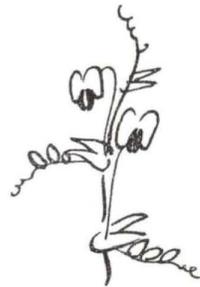


昭和39年2月に調整された吹田市全図の一部

平成十八年十二月、伊丹発羽田行きの航空機に搭乗したところ、同機は、たまたま、関西大学構内の南外側を飛行したので、常時携行しているデジカメで、機窓より数枚の写真を撮りました。その中に、偶然にも前記の地図と、ほぼ同じアングルの写真が一枚撮れていました。写真は多少ボケ気味のところがありますが、四十三年前の地図と比較戴ければと思います、併せて掲載させて戴きます。

尚、画面の中央が、母校の千里第二小学校で、その下方一带は関西大学構内です。

以上





平成18年12月 筆者搭乗中の機窓より撮影